

発行にあたって

本資料集は、本学の機関誌の役割を果たしてきた『法学新報』から中央大学関係記事を抜粋・編集したもので、同趣旨の第十七集以来、五冊目にあたります。今回は、一九一七（大正六）年一月から、本学が四月新学期制へ移行し、大きく学制を変える直前の一九一九（大正八）年三月までを対象に、この間に発行された二四冊（第二七卷一号―第二九卷三号）より一〇一件の記事を採録しました。

本集では、一九一七年六月一〇日の失火による校舎・図書館全焼、同年八月二一日学長奥田義人の死去と相次ぐ不幸な事件に関する資料が多くを占めています。校舎および図書館の焼失は、一八九二（明治二五）年の神田大火で失って以来、その困難をはね返しつつ再建してきた本学にとって、再び襲い来たった大きな危難でした。校舎は、創立二五周年に際して大規模な増築を行って間もないものでした。また、図書館はビルクマイヤー文庫を始めとする内外の貴重な書籍で占められていましたが、それらすべてが烏有に帰りました。さらに、中央大学、法学新報社ともに多くの書類を焼失し、講義録をはじめ、大審院、行政裁判所の判決録、あるいは法学新報などの出版物の面でも大きな痛手を被りました。しかし、そんな困難のなか、卒業試験が明治大学や専修大学、東京工科大学の協力によって、わずか二日遅れたのみで無事終了できたことに見られるように、学外からも強力な支援を受けつつ態勢を立て直すことができ、再建に向けて迅速に動き出すことができたことを、多くの収録資料が物語っています。

また、奥田義人学長の死去に伴う多くの追悼文からは、彼が本学において占めていた位置の大きさがうかがえますし、一八八三（明治一六）年のいわゆる「大学騒動」時の奥田の行実なども多く語られ、その人となりだけではなく、歴史的にも貴重な証言となっています。

さらに本集では、大学令・高等学校令の公布など、本学をとりまく状況の大きな変化と対応に関する記事を収録しています。大きな痛手を受けつつも、岡野敬次郎新学長とそれを支える理事者の下、維持基金の募集、圖書の寄附など本学学員にとどまらない多方面の人々や機関からの支援を受けて、再建と新たな飛躍へと踏み出す本学の動きを収録資料から読み取って頂ければ幸いです。

二〇〇九年三月

中央大学史料委員会専門委員会主査

本 間 修 平